

研修名 支援を必要とする子どもの保育

令和元年8月8日(木) 10:00~16:00

講演 「特性のある子どもへの支援スキルの習得」

講師 京都府立医科大学大学院 全 有耳 氏

## 1 講演要旨

### 1) 発達特徴のある子どもに対する支援の考え方

①素因(持って生まれたもの)+環境要因(環境との兼ね合いの中で特性が活かされるかどうか)  
→両親がその子の特性を知っていると、それに合わせた環境を考えたり、周りの子ども達の理解があれば、「こうすればいいよ」などの言葉掛けができる。

### ②発達障害児・者の診療・支援をめぐる問題

- ・スペクトラム性→医療中心の対応では限界がある。予防的介入(環境調整)が重要
- ・養育環境の問題→児童虐待、愛着障害のリスク、育てにくさへの支援
- ・思春期、成人期の支援(二次障害、大人の発達障害)→小児科、児童精神科、精神科の連携


### ③発達障害と虐待

- ・親にとって障害が分かりにくい方が、子どもに期待して虐待のリスクが高まる。

### ④求められる方策

発達特性への気づき→環境調整・発達支援・教育→次のステージへのつなぎ

### ⑤発達のアセスメントの際に考慮することと、支援の目標

- ・発達のスピードはどうか
- ・発達の偏りの程度                      その先の目標は?                      その子に応じた発達課題の達成と自己
- ・環境因子の影響は?                       理解、自己肯定感の育ちを支援すること

### 2) 行動理論を用いた子どもへのかかわりのポイント

#### ①ティーチャー・トレーニング

- ・子どもの行動を観察し、増やしたい、好ましい行動に注目する。
- ・肯定的な注目をしたら、すぐに具体的な言葉掛けでほめたり、感謝する。
- ・行動を3つのタイプ(増やしたい行動・減らしたい行動・許し難い行動)に分け、一貫性をもって対応する。

#### ②行動の機能分析と環境調整

A:事前(きっかけ) → B:行動 → C:事後(結果、周囲の対応)

※行動の後の結果によって、次におこる行動が変化する

嬉しい結果により、直前の行動は起こりやすくなる=強化

### ③好ましくない行動への対応

- ・無視＝見て見ぬふりをして好ましい行動を待ち、好ましい行動に変わったらすかさずほめる。
- ・行動の結果に責任をもたせる。  
※子どもが「しまった!」と感じる結果を与えることで、直前の行動を減らすことができる。  
A : きっかけ ⇒ B : 行動 ⇒ C : 結果



例：1 特権を取り去る（子どもの楽しみに制限を与える）  
2 結果への責任をとらせる  
3 もう一度させる

### ④子どもの行動が改善されるポイント

- ・いきなり高望みは禁物!
- ・子どもの行動をよく観察する
- ・今できることから＝スモールステップで
- ・注意する時は「すぐに」「具体的に」「わかりやすく」
- ・「できた!」の達成感をもたせる課題設定
- ・あきないように興味をもたせる工夫
- ・一貫性のある対応

### ⑤上手にほめるポイント

- ・良い行動が見られたら、すぐに
- ・25%でまず1回（その気になったぐらいで1回注目）、やり終えたらもう1回
- ・何が良かったかを具体的に伝える
- ・プロセスに注目する（結果だけほめない）

## 2 感想

子どもの気になる行動をワークシートに記入しながら、どうしてこの行動に出たのか、どうすれば上手く対応できたのかなど具体的に考える中で、普段の保育でも取り入れていきたいと思うことがあった。特に印象に残ったことは、小さなことでも良いことに目を向けて、肯定的に考えることである。今まで否定的に見ていたことでも、スモールステップでその子なりに成長していることに気付き、肯定的に見ることの大切さを知ることができた。またこのことは、どの子でも当てはまる為、普段から子ども達の行動をよく観察し、小さなことから褒めていくようにしたい。

他園の保育士の方々と意見交流ができたことも良かった。似たような悩みごとやその時の対応について様々な意見が出たことで、また違った視点から物事を考えるきっかけとなった。